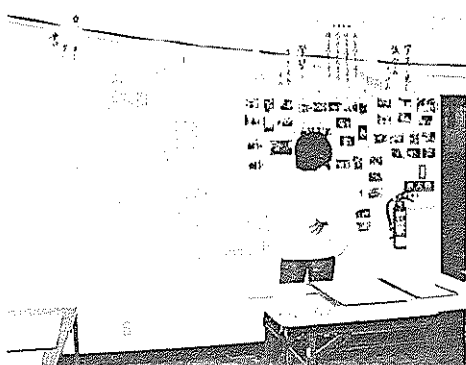


17年間の歩みを紹介 第1回識字学級文化祭

野中地区識字学級の十七年間の学習の成果や西部保育所の園児と

の交流の様子を展示した「第1回野中地区識字学級文化祭」が、十一月十三日から十五日までの三日間、第五集会所で開かれました。



写真なども展示され、学級の歩みを紹介

この識字学級は、昭和四十六年、県の補助を受けて、野中地区や前浜地区の人を対象に同和教育事業の一環として始まったものです。

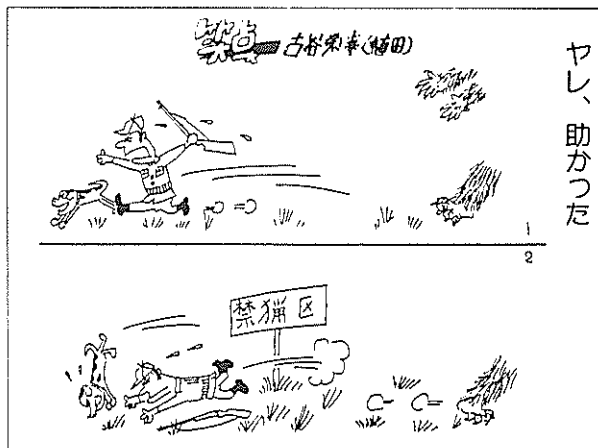
当初は字を習うということに抵抗があつたのか、七人だった学級生も今では六十歳から九十歳までのお年寄り二十七人。日章や篠原からも参加して、毎週月曜日と金曜日の二回二時間ずつ、当初から指導員をしている山中幸幸さんの心を捕らえた指導を受けてがんばっています。

ここで学んでいる方は、「投票が自分でできるようになった、病院の受付に自分で名前が書けるようになった」、「世の中が見えてきて楽しくなった、心が開けてきた」などと喜んでおり、多くの人が「死ぬまで続けたい」と話しています。

市の担当者は、「今までの部落差別によつて、同和地区には貧しい生活をするために学校に行けず、読み書きができない人がいるという現実

最も感激したことの一つです。初めて比べるとみんな字が上手になっている。学級生に明るい希望が出てきたことがうれしい」と話しています。

文化祭では、学級生が指導員にあてた年賀状など、年々字が上手になっていく様子や絵など、十七年間の学級の歩みが一堂に紹介されています。



南国歌壇

ふたたびの月日あらざりししみじみと 極月といふ暦みる朝

十市 山本憲彰
世界五位とう威容を誇る瀬戸大橋
ゆうらん船にときめきて見る

亀岩 島本栄
振舞はれし茶菓の器に一輪の
海棠の淡き紅も添へらる

廿枝 門田美枝子

褒めらるるは只に哀しき四十年
寡婦とう足枷曳りて来し

植野 永野美由
狹りをなさねばならぬ薄化粧
別れ惜しむか微笑みてあり

前浜 沢田千恵子
伝記読み兼山偉業たたえなん
はるか彼方の野のはてまでも

立田 国繁和子

南国柳壇

八十路越す母の手をひく六十路坂
三番 井沢正子
カラオケで格好だけはシビレてる

前浜 大原正明
表彰の孫へ小さな腕をほめ

廿枝 島田稔子

それぞれの名札通りの菊咲ける
中座せる人と連だち十三夜
病む母の背な拭ひやる十三夜
草紙こぼれておりし検診車
洗濯の渦にどんぐり浮び出し
泡立草咲く高速路分離帯
柿落葉掃けば心の濁く音
秋景の一色となり救急車
秋一日無音界へとひきこまる

和泉まき(園分梵鐘句会)
吉川 節()
田内賢代子()
津淵竜男(天狼俳句会)
木戸 節()
中村榮生()
和泉えい子(忍冬句会)
永田まさき()
川村ひろ()

南国俳壇